

平成 25 年度 第 1 回全域計画推進懇談会	
日 時	平成 2 5 年 6 月 2 0 日 (木) 午後 2 時から 4 時まで
場 所	区役所 5 階大会議室 AB
出席者	<p>青木委員、網代委員、上原委員、大貫委員、岸本委員、北井委員、清水委員、高橋委員、田村委員、中野委員、名和田名和田委員、諸橋委員、宮田福祉保健センター長、井原センター担当部長、宮谷総務課長、山口区政推進課長、石原地域振興課長、金子地域力推進担当課長、磯田生活衛生課長、伊澤高齢・障害支援課長、杉本こども家庭支援課長、窪野保護課長</p> <p>二ツ橋地域ケアプラザ 讚井所長 阿久和地域ケアプラザ 山本 中屋敷地域ケアプラザ 黒澤所長 下瀬谷地域ケアプラザ 田中所長 三好 二ツ橋第二地域ケアプラザ 安部所長 (事務局) 新井福祉保健課長、小清水区社協事務局長、仲丸区社協次長、齋藤係長、堀江、二階堂 佐橋</p>
内 容	<p>1 開会</p> <p>2 議題 (1)24 年度全域計画の取組について(資料1) 新井課長より説明 1 により説明</p> <p>委員 前から評価をやっていただいている。全市計画ではなかなか評価ができずに悩んでいるので、区で住民を巻き込んでこのような評価が出来ることは素晴らしい。</p> <p>【意見交換】</p> <p>委員 地域での個々の活動があって、瀬谷区全体の活動となっているので、各地区の地区別計画と全域計画の整合性を考慮し、それぞれがうまくかみ合っているかを見ていくことも今後は必要かと思われる。</p> <p>福祉保健課長 現在、全域計画については点数化し評価しているが、地区別計画は評価を実施しておらず、地区社会福祉協議会を中心に地区ごとで振り返りを行っている。 年度ごとにそれぞれの振り返りを行い、地区別計画と全域計画の結びつきを確認していくことも重要な課題だと感じている。</p> <p>委員 地域福祉保健計画の福祉活動は各団体が頑張っているが、保健活動はまだまだ足りないと思う。 特定健診は健康作りにとっても大事だが、受診率は全国で 60%だが、横浜市は 10%程度という状況である。</p>

健康づくりで気軽にみんなのできるのがウォーキングである。瀬谷区は水と緑が豊かで環境にも恵まれているのでウォーキングの取組もさらに進めたい。

福祉保健課長

特定健診については、横浜市の中でも瀬谷区が一番低い。別な会議で、案内はもらっても受けにくいと言う意見をいただいた。

医師会との会議でも話していきたい。

今年度から 100 万人の健康づくりで健康寿命を 10 年延ばしましょうという計画があるがその中でもウォーキングは重要な取組となっている。

委員

特定健診の目的は、健康な人の中から拾い上げることであるが、定期的に受診している人が来てしまったりする等、特定健診の目的がまだまだ理解されていない。特定健診を受けにくいというご意見については詳しく伺いたい。

委員

定期的に通院して検査を受けている人にとっては、改めて特定健診を受ける必要があるのか疑問に感じる。健康で通院していない人に対して実施したほうがよいのではないか。受診率が低いというがそのように受ける必要がない人もいるのではないか。

委員

受診という話題に関連して、障害がある子は、医療機関にかかりにくいと言われている。障害の有無に関わらずどこの病院でも受診できるが、待合室で騒いでしまったり、白衣が怖かったり、医師からの説明が十分にされないとな納得できない等の受診の際に問題がある。大阪市や市川市で良い取組があると聞いているので瀬谷区でも考えてもらえると良い。

また、計画全体的にみて、幼児の話が拾われていないと感じた。

委員

病院側も避けているわけではないので、受診が難しい状況を聞かせてほしい。また、他都市での良い取組があるのであれば取り入れたい。是非、話し合いをして、受けやすい環境を検討していきたい。

委員

意見交換の場がもてるとよさそうである。

委員

推進課題 4 について、南瀬谷地区では高齢者の拠点が設置され地域で活用されている。横浜市として、瀬谷区として、公共の施設等を活用しながらもっと増やしてもらいたいと思っているが進んでいないようである。

私の地区では地域交流サロンが 2 カ所増え 11 カ所になった。とても多くの方

もどんどん大きくなるので、親が育てるのは当たり前であるが、育てきれない親の分を地域で見守れるとよい。

委員

今の話は大事で、瀬谷区で進めようとしている、「顔の見える関係づくりから始める地域の見守り～防災事業」とリンクするのではないか。

子どもは親だけが育てているのではなく、地域みんなで育てる、隣近所で声をかけ合うことが大事で、このことも「顔の見える関係づくりから始める地域の見守り～防災事業」の取組の中に入ってくるもの。地域福祉保健計画と別々に取り組むものでなくリンクをさせながら取り組んでいくもの。

「お互いに地域の中で見守り合う」という基盤ができあがっていると、そのような問題も解決していくのではないだろうか。

子どもの居場所の問題は、昔は親の帰宅が遅かったら隣の人が見てくれたりしていた。そのようなことをうまく考えたサロンや拠点があってもよいと感じる。ただし、夜遅くまで地域のサロンで対応するのは難しいので、様々な事業をうまく横つなぎにしていけることが大事。

委員

さまざまな事業に関して、私は港南区で「プレイパーク事業」に関わっているが、そこが学校に行けない子の居場所になっている。そこだけで良いわけではなく、他にもさまざまな場所があり、その子どもを支えられるようになるとよい。

委員

地域の大事なお子さんを地域の皆で見守り、関わりたいと考え、区から提案された「いきいき瀬谷っこ」事業に取り組み、高齢の方が子どもに昔遊びを教えてくださいなど、多くの方が参加し地域の方とお子さんとの交流をする催しを長年続けている。

若いお父さん、お母さんがその催しに参加し、地域の方々と気軽にお話する機会となり、地域の人の子どもの対する思いを感じてもらえる機会ともなっている。たゆまぬ努力が町の方に通じ、みんなで見守っていこうという気持ちが芽生え育っていくと思う。

外にも、学援隊活動も行っており、子どもに声をかけてもらったり、しかっもらったり、地域でのつながりができている。

ひとつひとつの事業が単に地域の人とのふれあいだけで終わるのでなく、広く意識を持つべきだと思っている。

災害に関しても、地震が起きたとき、まずは自分と家族を守ることになるが、それと同時に公園など近くに子どもが周りにいないか心配りをしてくださいと地域のみなさんに訴えている。

福祉保健課長

冊子の冒頭、「互いに見守り、支え合うことから始めよう」とあり、P4に「問

題解決のためには地域で気づくことが重要です」とあり、P11 さいごには、「顔の見える」重要性を書き、「あいさつ」をする手法も書いてある。

委員

この懇談会は2回目で、今回の資料を見て初めてこんなに地域福祉保健計画の取組が行われていることを知った。日中働いている人には地域福祉保健計画が認知されていないのではないか。我々も勉強しなくてはいけないが、サラリーマンなど日中、瀬谷区にいない人にも伝わるようなものであると良いと感じた。

青少年指導員でも児童虐待について研修を開き、虐待の現状や対応について勉強した。子どもだけでなく親も苦しんでいるという話などがあった。複雑な問題があることを知り、いろいろ考えるきっかけになった。

委員

まだまだお勤めの方の立場から意見をいただきありがたい。
朝早くから夜遅くまで職場にいらっしゃる人に伝える工夫を考えたい。

委員

見守り、支えあいの取組で、三ツ境のある地域は広報を配る時に、班長が訪問して配っている。広報を配る等の目的があると訪問しやすい。高齢者の見守りに有効であり、是非、三ツ境内の他の地域でも広げていきたいと考えている。

委員

昭和61年から認知症の取組を行っている。認知症の研修を受けた人が活動に入っただけのような取組をしてほしい。

(2)地域福祉保健計画等に関する調査について(資料2)

福祉保健課長

今年度は、5カ年計画の3年目であり、前半の振り返りと後半の取組に向けての検討材料とすることと、第3期計画策定の基礎資料とするために地域福祉保健計画等に関する調査を行う。

前回の懇談会でも調査項目についてご意見をいただいたが、そのご意見を基に新たに「日頃の心配事」「日頃の見守りと災害時の助け合い」「自助・共助・公助」に関する項目を作成した。それらについてご意見をうかがいたい。

あわせて、前回の懇談会で調査対象年齢を中学生まで引き下げてもよいというご意見があったが、その点についてもご意見をうかがいたい。

【意見交換】

委員

健康づくりに関する取り組みで、横浜ではウォーキングの目標を1万歩としているが、実際にどのくらい歩いているのか現状把握していない中での設定なので、その点が調査できると具体的方針が出てくるのではないか。

委員

健康づくりに携わっている方たちは関心のあることだろうが、歩数を測っている人ばかりではないので、モニター調査など、この意識調査とは別の手法になるのかもしれない。

委員

心配事を第1位から第3位まで選ぶ設問となっているが、3つに絞るのは難しいのではないかと。3つに絞ることで4つ目以降の項目が把握されないのではないかと。第5位まで選べた方がよいのではないかと。

心配事や困っていることの相談先について、「警察」は「警察署」にした方がよい。

委員

調査対象者に高齢者がいる中で、「高齢者になった時の不安なこと」という設問は、不適切ではないかと。

委員

将来の不安について聞こうとしている設問だと思われるので、聞き方を工夫するとよい

委員

不安なことの選択肢として「仕事」「健康」「孤独」等とあるが、「仕事」の不安も様々な場合が考えられるため、もう少し細分化して聞いた方がよい。

「近所で困っている人がいた場合」の手助けの内容が漠然としていて回答しづらいのではないかと。

委員

全般的に設問が具体的でなく曖昧で回答しにくい。

委員

大人でも回答に悩む内容を中学生に行うのは難しいのではないかと。仮に行うのであれば別の調査票にした方がよい。今回は18歳以上を対象とすることでよいのではないかと。

委員

回答する立場になって考えると答えにくいものが多い。

「近所で困っている人」といっても、声を掛けやすい人なのか掛けにくい人かで回答が異なり、本当の回答が得るのが難しいのではないかと。

委員

近所の人にも色々いるの「近所で親しくしている人」等と工夫すればよいのではないかと。

委員

同じ近所の人でもその人との関係性によって手助けできるかできない回答が異なってくるので聞き方が難しいと思う。

委員

これから瀬谷区で取り組む手引書「顔の見える関係づくりから災害時の助け合いへ」では、なるべく小さな範囲で見守ることを勧めているので、その範囲を「近所」と考えているのだろうが、自治会の範囲が「近所」捉える人もいる。「近所」を具体的に示した方がよい。

関係性によって見守りたくない人がいるというのも本音だが、これからはみんなで見守っていかなくてはこれから先は成り立たない。

意図するところを導き出せるような設問になるよう丁寧に説明した方がよい。

委員

「子どもの送り迎えや預かり」という項目は、個人的に障害の子だと難しいと、自分に照らし合わせて考えてしまう。

委員

手助けの設問で「近所に困っている人がいない」という選択肢はどういう意図で設定したのか分からない。

委員

日常の手伝いは嫌だけど、災害時の安否確認はやらざるをえないということが考えられるので、庭の手入れ・植木の剪定等、日常的な事と、災害時と一緒に聞かれているのどうなのか。

委員

災害時と限定したのは、日常はやりたくないが災害時はやってもいいというのを知りたい意図かもしれない。

委員

高齢者の在宅介護でお宅に行っていて、救急車を呼ぶことがあるが、昔は、救急車を呼ぶとご近所が出てきたが、最近は誰も出てこない。ご近所に感心がないのか、関わりたくないのか。

委員

野次馬度は、ご近所の関係度合いを測る指標だと言われている。

委員

アンケートの選択肢は、一つ一つじっくり考えるより、見た瞬間に選択していくものではないか。設問の中身をあまり細かくする必要はないのではないか。

委員

私も賛成で、具体的にしすぎると逆に自分に該当するものを探すのが難しくなるのではないか。

福祉保健課担当係長

アンケートの検討は、8月中旬～20日確定したいので、7月中にご意見をいただければよい。

(3)25年度全域計画について（資料3）（資料4）

福祉保健課長より資料3、資料4により説明

委員

検討委員として手引き書作成に関わらせていただいた。

担い手となっていただく自治会町内会、民生委員の方に説明会で手引書を渡すことができた。研修会では多くの方が参加し、質疑やご意見も活発に交わされた。どのように進めたらよいのかと前向きな質問やご意見が多かった。それぞれの地区で熱心に取り組んでいてもらいたい。

防災拠点、自治会町内会での防災訓練で、この手引きで言う「顔の見える関係」ができ、隣近所の方がよく分かるようになることで、万が一、災害が起こった時、安否確認は誰でもできるが、大人の避難の手助けをする手法は日頃より考えておかないと、皆さんを安全に避難させることはできないと感じている。

(4)その他

委員

阿久和北部の見守り家のオープニングに参加した。

まち普請事業で進められた事業で、地域福祉計画から出ていた事例であり、今後どのような活動が行われるか楽しみ。

先進的に行われている瀬谷区の代表である。

委員

まさしく協働事業そのものだった。大変な場所での建設だったため、区役所の部署も超えて支援してもらった。

本格的に始動していくので、子ども達の居場所、一人暮らしの高齢者、赤ちゃん抱えているお母さん等だれでも来ることができる場になればよい。

	福祉保健課担当係長 平成 25 年度の予定について 9 月 地区別計画推進研修 11 月 16 日 地域福祉保健計画推進シンポジウム (公会堂) 2 月中旬 第 1 回地区別計画推進懇談会 3 月 6 日 第 2 回全域計画推進懇談会 3 閉会
次 回	平成 2 6 年 3 月 6 日